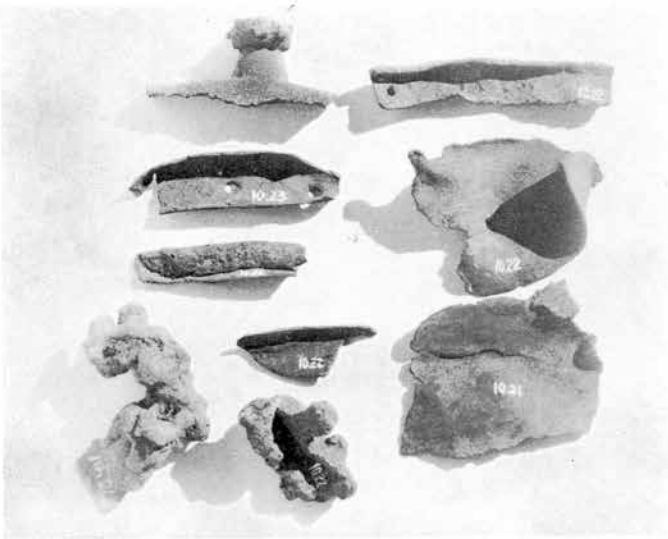
「高井」第四十六号別刷

建応寺跡第一次発掘調査

中野市教育委員会

建応寺跡第一号堂址出土御正体

1.銅製阿弥陀如来坐像　2.銅製観音菩薩像
3.銅製神像片



鏡板片および銅塊

建応寺跡第一号堂址礎石

発掘調査の状況

建応寺跡第一次発掘調査

中野市教育委員会

一、調査の経過

㈠ 発掘までの経過

昭和五二年一一月、当委員会は市内大字間山字建応に所在する建応寺跡の緊急分布調査を実施した。その結果、標高六七〇～七一〇メートルの渓谷を削平し、寺域は五段の平坦地を造り、その面積はおよそ七〇〇〇平方メートルにおよび北側には尾根の稜線をたくみに利用して長さ一〇〇メートル巾三～一〇メートルの土塁を設けていた。堂址の礎石群は三か所から発見された。寺域の広大なことや地形の状況から、このほかにも堂址が埋蔵されているものと思われた。

目下編さん中の市誌資料を得るために春以来準備をすすめ、地主の金子博徳氏の快諾を得、調査団編成を終えた。また地元間山部落では区をあげて協力体勢をつくってくださった。

本調査の実施見通しがついたので、いよいよ法手続をとるため、文化庁長官あてに八月二三日付をもって届出を済ませた。

㈡ 調査団の構成

今回の発掘調査を成功させるため、左記のとおり調査団を構成し、それぞれの方々に、一〇月一二日に市教育委員会名でご委嘱申しあげた。

○建応寺発掘調査団の構成

調査責任者　山田芳二郎　中野市教育長

顧　　問　金井喜久一郎　長野県文化財保護審議委員、信濃史

料刊行会常任編さん委員、
調査団長　金井汲次日本考古学協会員、中野市文化財保護審議委員、
調　査　員　田川幸生　日本考古学協会員、平野小学校教諭
〃　小林軍司　中野市誌編さん協力員、
〃　檀原長則　長野県考古学会員
〃　金井文司　長野県考古学会員、小布施町公民館主事、
調査補助員　池田実男
調査協力員　海野桂ほか七名
調査協力団体　間山区
事　務　局　中野市教育委員会事務局社会教育係、

㈢　発掘経過

一〇月二〇日（金）晴

午前は、発掘用具を建応寺跡登り口まで車で運搬し、そこからは、車で登れないため、天幕等を背負い、約二〇分もある山道を現地まで用具を運搬し、ようやく現場設営をした。また、調査の成功とあわせて寺院跡でもあるので、慰霊を行った後、一号堂址の下草刈りや清掃作業に入った。午後は、午前に引続いて清掃作業を行い、堂址内の礎石を基準にしてグリットを設置。各グリットに分れて表土はぎからの発掘調査に入った。内陣手前の中央あたりで古銭二枚、土師器片等発見。参観滝沢善次郎氏ほか。

一〇月二一日（土）くもりのち雨

昨日に引続いて発掘調査を行う。あわせて不明の礎石さがしも行う。午後も発掘調査を続けたが、雨足がしげくなりやむなく作業を中止する。参観山田昭雄氏ほか。

一〇月二二日（日）晴

朝から熱心な発掘調査が続いた。その甲斐あってか、内陣中央右手から仏像の冠らしきものが出土、緊張のうちに調査を続ける中で、約三〇センチ程離れた所から今度は丈約六、五センチの仏像を発掘、調査団員の目は一段と輝きを増した。午後になってさらに仏像一体を発見、続いて鏡板の破片と思われる銅片のかたまりも検出、次から次へと出土の続く中で、本調査が完全に成功に向っていることを誰しもがうなづける喜びの一日であった。

第1図　電波探知機調査

参観矢野秀和君ほか。

一〇月二三日（月）晴

前日の仏像発見により、全員に調査意欲が一層溢れる。昨日仏像の発見された付近を中心に精査したが、土師器片数点が発見されたのみであった。参観金井明夫氏ほか。

一〇月二四日（火）晴

仏像発見の知らせに報道関係者等が相次いで訪れる。今日も一号堂址全体にわたって、精査をした。堂址両側に新しい礎石を発見、この礎石は廻縁にあたり角石二個を並列していた。参観小池章夫氏ほか。

一〇月二五日（水）晴

午前は、未発掘と思われる箇所について発掘調査を行う。土師器片、灰釉片など発見。午後は、山からの転石を全員で片付け、堂址の規模を知るため、礎石間の測量を行う。

休憩中、村史や建応寺にまつわる伝承が話題になり、電波探知器による調査をしてみたらということになり、水道課技師に調査を依頼する。参観野田晴夫氏ほか。

一〇月二六日（木）晴

発掘した土を埋戻し作業を行うとともに清掃をし史跡としての風貌を整える。午後は、水道課技師による電波探知器調査を開始する。参観黒崎利夫氏ほか。

一〇月二七日（金）くもりのち小雨

建応寺跡及び周辺一帯にわたり電波探知器三台をもって調査を行う。疑問と思われる数か所を発見したが、これによる発掘調査は相当大規模になることが予想されたため、来年度に調査を見送ることにした。測量を丹念に実施した参観鈴木正信氏ほか。

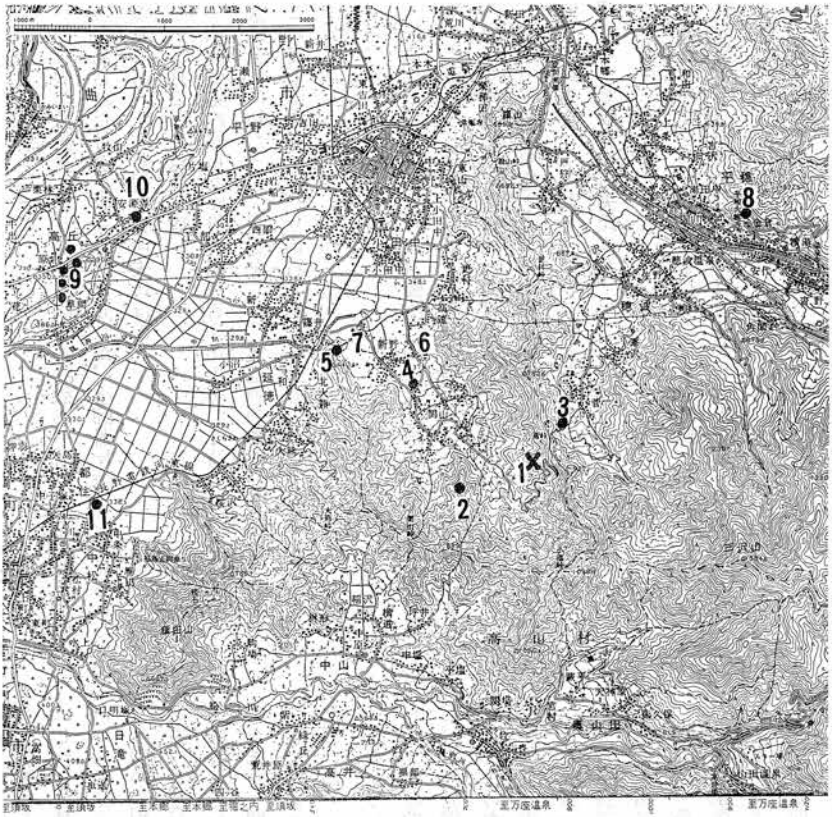
一〇月二八日（土）雨のちくもり

今回の発掘調査計画が全部終了したので、小雨であったが、現場撤去作業を行う。午後は、間山公会堂において、関係者による調査報告会とあわせて慰労会を行う。団長の金井汲次先生から詳細な報告があり、顧問の金井喜久一郎先生から約四〇分間にわたって地域の歴史関係と結びつけながら建応寺跡を考察した貴重なお話しをいただいた。

このように今回の第一次調査は終了したが、晩秋であるにもかかわらず比較的好天に恵まれ、予期以上の成果をあげることができた。次に発掘調査に御協力くださった方々の芳名を左にかかげ、感謝申しあげたい。（敬称略順不同）

中山　袈市　　山林　俊文　　羽片　邦義　　矢野　忠良
牧野　政一　　海野　福松　　小林　義一　　酒井　深志
矢野　自二　　古川　光夫　　小林　堯男　　小林　博
海野　昭二　　阿部　光彦　　小林　幸吉　　小林　恒子
黒岩　一衛　　田村　義春　　吉川　矩雄　　春原安太郎
鈴木　正信　　酒井　一　　海野とらえ　　海野みちこ
伊東　隆次　　羽片　正人　　岩戸　啓一　　小林市兵衛
割田市太郎　　山崎　義郎　　小林　俊幸　　米沢　広夫
湯本　彦疋　　小林　貞

（山口　耕一）



第2図　遺　跡　等　の　分　布　図

1. 建応寺跡　2. 真山城跡　3. 見王寺跡　4. 石動下遺跡　5. 金鎧山古墳　6. 十二川
7. 裾無瀬川　8. 弥勒石仏　9. 草間窯址群　10. 安源寺遺跡　11. 銅造観音菩薩立像出土地

二、立地と歴史的環境

建応寺跡は間山部落の南東、雲井岳の山ふところにあって、標高約七〇〇メートル、山麓を通る林道より約七〇〇メートル上ったところにある。間山部落は三方を山に囲まれ、西北に開けた傾斜地（斜度約五～六度）である。囲繞する山なみの中でいちばん高いところを土地の人は剣の峯（一、一六〇）と呼んでいるが、村誌には剣の峯附近の山々を総称して雲井岳と記してある。剣の峯から西方につづく尾根は高山村との境界で北にのびる尾根は菅・佐野との境界となっている。剣の峯から東南東に三沢山（一、五〇四・六）笠岳（二、〇七五・八）と続く。これは横手山（二、三〇四・九）で西方と東北方の二つに分かれた火山脈の西方の支脈であって剣の峯から更に二つの支脈に分かれ、西方に走る支脈は山田峠附近で更に延徳と小布施方面に分岐して松川扇状地に達している。一方剣の峯から北にのびる支脈は建応の東から更科峠を経て箱山に達している。前述の郡市

町村界もこの支脈に沿ったところが多い。

千曲川東岸一帯の連山は上信火山帯といわれ断層線が縦横に走って、火山活動の年代が古く地塊運動もまた盛んであった。特に中央地溝帯に堆積した地層や岩漿の圧力で、東の連山一帯は大きく西の方に傾けられ、高くおしあげられてしまった。このため東の連山一帯の地形は浸蝕がひどく、岩石は変質し、山々の尾根はいくつにも分かれ西に急傾斜して山の鼻先を麓の扇状地の中に突っ込んでいる。北信五岳や永峰丘陵の裾のような地形とは対照的で複雑な地形になっている。間山地籍の地形も剣の峯から急傾斜で西に下り、分岐したいくつかの尾根先が耕地に埋っているこの複雑な地形が建応寺の伝承をはじめ谷間谷間に山に峯にいろいろな昔話がかたりつがれてきたのも、このためと思われる。

間山は松川↓万座川断層線、角間川断層線、と延徳　須賀川断層線に囲まれている。したがって松川や角間川、夜間瀬川のような広い流域をもった川はないし、はっきりした扇状地もない。十二川は建応寺跡附近より発し部落の北側を流れ下り、裾無瀬川は雲井岳内の道観山附近より発し部落の南側を流れ下り、二つの川は新野地区を流れて篠井川に合流する。二川とも水量は少く潅漑用水に足る程度であるが、豪雨や、なが雨の時は急流岸をあらって耕地を荒すことがある。間山から新野にかけて扇状地様に見えるのもこの川の作用と思われる。地籍内のところどころに伏流の末端ともみられる清水の湧出しているところがあって石動(いすどう)権現さんの清水は著名である。

雲井岳の山ふところにある建応寺跡一帯は地味もよく植林が進んで、三・四〇年もたつかと思われる杉木立が、うっ蒼と生いしげっている。寺跡の内で、つたえられる鐘楼跡から眺める北信五岳はまた絶景である。戸隠山霊場の梵鐘と建応寺の梵鐘が共鳴りしたという夫婦鐘の伝説が生れたのも、もっともなことと思われる。附近一帯にある細流は十二川の源流となっている。

建応寺跡へ通ずる道は三つある。一つは間山部落から通ずる道、一つは北東に約一二〇〇メートル程で山田から菅へ通ずる峠に出る。峠から菅の部落は眼下に見え、せまい山道ではあるがいまも通る人がある。もう一つは南へ小池峠に通ずる古い道があったようであるが、いずれもいまは利用されていない。新しい道としては遺跡の裏山を通る菅線林道が開けたし、柳入地籍から遺跡までの林道がいま工事中である。

こんど発掘されたところを元禄の山割の時には寺屋敷と記してある。いまも村の人は「げんのうの寺屋敷」とよんでいる。寺屋敷の西傾斜面は延宝検地で仁王堂といい、数十筆の耕地になっていた。段段畑になっていたようである。大正の頃まで寺屋敷の近くに桑畠があった。地名として建応となったのは明治になってからのようで範囲も非常に広い。

「建応寺」については伝説的に語りつたえられているだけで、間

山にある古文書にも建応寺にかかわるものはすくない。村誌に記されている「建応寺古蹟」のことは出典文書未詳で今後の研究調査を俟つほかない。

（小林軍司）

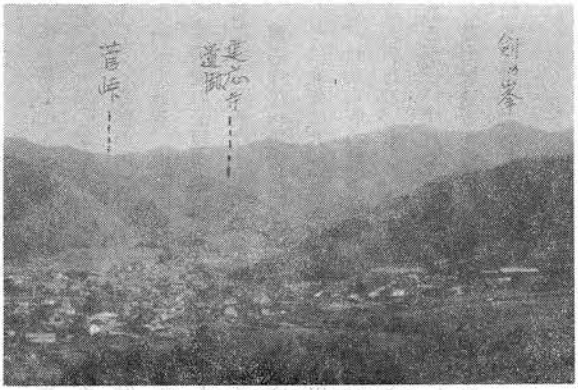
三、遺　構

第一号堂址は植林された、樹令約三五年の杉、落葉松の中にあり、昭和四七年に東面の山腹に林道工事が行われた時の転石が数個と、長い年月の間に崩落した岩石があり、今回の調査でかたづけられた。林道には岩脈が露出し、火山岩の一種で小紋岩（下高井郡誌地質編六一七頁）の自然石が礎石として用いられている。主柱礎石には径八〇㌢内外の石が、廻縁には五〇㌢内外の石が用いられ、主な礎石は、従来より露出していたが、廻縁の北側と東側が土石の崩落で埋っていて今回の調査で全体の規模を知る事が出来る様になった。西方を正面とした堂址で、現在の峠道より一〇メートル程東側にあり、この間は特に敷石などの遺構は検出されなかった。

南側は堂址より一二米の平面をおいて、高さ約六㍍の土手となって南方に低く下段に連っている。東側は山腹面で四㍍程傾斜面を削りとって築造の際、利用され、下方は土石で埋っていた。北方はほぼ平面で約一六㍍で次の第二堂址に連っている。

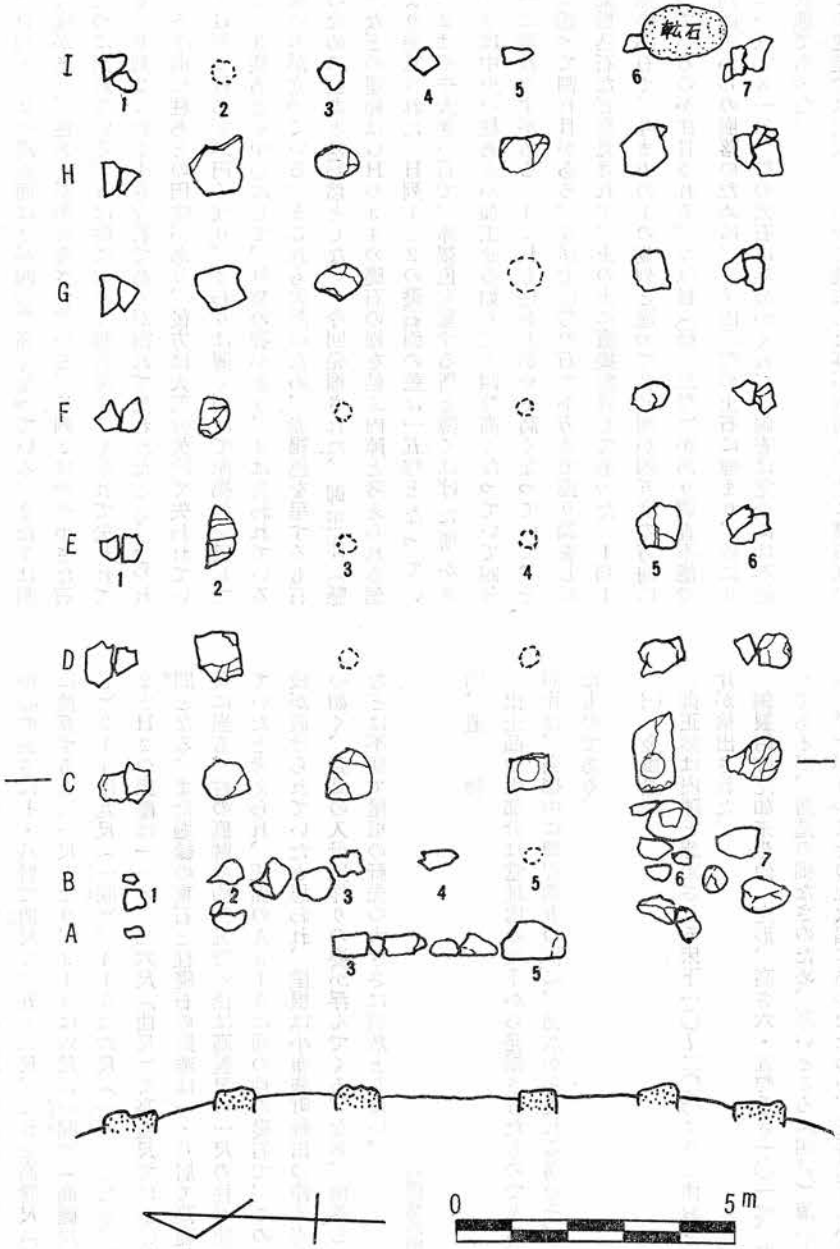
前方部より見た堂址は基壇が九〇㌢高く土盛され、廻縁の礎石面とは五〇センチの高低差がある。奥（東側）は地山面となっている。

次は各位置の礎石の観察を記すと（測図参照）A列3は後方部に火焼面があり、5はやや大きい石で中央に柱あとが残り、3と共に柱の礎石と考えられる。B列は植林と地盤がやわらかいためか大分位置のずれている石があり、35は杉の木があり不明であるが、七個所の廻縁の礎石（束石）が考えられる、C列は16は廻縁の束石で、CからIまでの1は全部角面を接した二個の石が並列して発見された。中央に柱をたて、柱下面の通風を図ったか、二本の柱が有ったか論議された。南面の67通りも並列していたとみられるが、埋没が浅く、石が小さかったために移動した個所もあると考えられる。



第3図　建応寺跡付近全景

2はまわりが欠けて中央が高くなっている。3は幾筋にも割れ疵があり、4は三・五㍍南西に移動していた石で、今回元の位置に復された、中央に約三五㌢の円柱のあとが残っている。5は堂址の主柱礎石の中でもっとも判然とした柱のあとを残す礎石で、火災の際、火熱をうけ柱下面と周囲との温度差のため、



第4図 第 一 号 堂 址・礎 石

外面が薄片に剝げて失われ、一㌢程、高くなったりして柱面が残った。D列1と2の礎石面は2が四〇㌢高くなっている。また2は割れて疵があり、柱あとが半分残されている。E列2はやや小さな石で三つに割れている。5は縦に大きく割れ薄片にも割れて失われている。F列2これも小さな石であるが割れて失われたと考えられる。5手前に柱あとの円味があり、後方は大部分欠けて失われている。G列2柱あとが円く残り、まわりは薄く剝げて赤褐色を呈している。3柱あとを中心にして、無数の疵があり、4は失われているが杉の木が立っている。5これも火熱のため、赤褐色を呈するも石質のために柱あとは判然としない。今回発掘された、御正体（懸仏）などの遺物はGHの34の礎石の線を結ぶ内陣と考えられる個所より発見された。H列1と2の礎石面の差は一五㌢となっている。2はやや大きい石で、赤褐色を呈する所と薄くはげた所がある。3は中央の柱あとが加工せる如く三～四㌢高くなっていて四分の一は割れきずがある。4これも柱あとがやや高くなっていて、それに添って割れ目がある。5径七〇㌢の石で不方まで掘り調査した結果根込石など発見されず、土の上に直接配置してあった。I列1廻縁の隅石で、今までの1の並列と違って合せ面が四五度の方向になっているのが注目される。2は杉（径二三㌢）があり調査不能でI列は山からの崩落のために二五～四〇㌢の土石に埋まり、特に6は径一五〇×一二〇㌢の大石に半分かくれて、調査は完全には不能の状態であった。

この建造物は火災にかかって焼失した事が判明し、次に礎石間の計測値を考察すると、建物の大きさは柱礎石前面（C列）215の中心の長さは七・八㍍で曲尺で二五・二尺、これを高麗尺（鯨尺）に換算すると二一尺となり、213は六尺（一間）（高麗尺以下同じ）314は九尺（一間）、415は六尺（一間）となる。次にC2とH2の距離は一一米、三六尺（曲尺）で高麗尺では三〇尺で五間となる。また廻縁の東石と柱礎石の距離は一・八㍍で高麗尺の五尺に当る、柱の痕跡の約三五㌢の径は高麗尺の一尺の柱が使用されていたと考えられ、正面のA315は廂の柱の礎石で、この中に階段が設けられていたと思われ、屋根は小布施町雁田の浄光寺薬師堂の如く、萱葺の入母屋作りの姿が浮んでくる。なお、雨落しの遺構などは不明で屋根の軒先の大きさは判然としない。

（檀原長則）

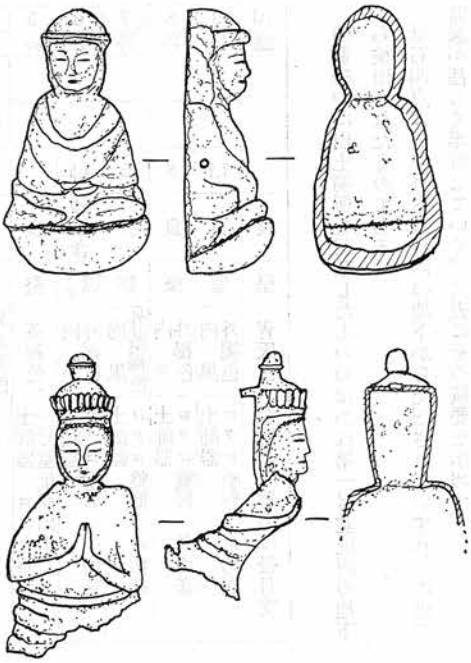
四、遺　物

出土品の大部分は堂址内の地下から発掘されたものであるが石臼四片は、発掘中に周辺調査の折に、湧水から流れる溝のそばから得たものである。

㈠　金属遺物

御正体は内陣と想定される床下一〇～二〇㌢より三体および鏡板片が検出された。

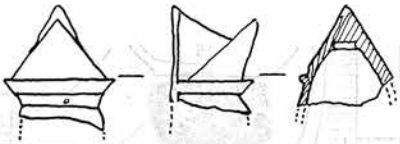
銅製阿弥陀如来坐像　完形、高さ六・五㌢重さ一〇一㌘、厚手造りであるが、鋳造の拙なさのため、厚いところ（四㍉）薄いところ（一㍉）があってその上火焔にあったためか、左耳朶下に小さな孔



があいている。頭部から下へ四㌢のところの胴部の横左右に径一・五㍉の孔があって、鏡板へ結びつけたものと思われる。堂宇焼失の時の火肌によって螺髪・面相・褶襞等は判然としないところがあるが温雅に感じられる。

銅製観音菩薩坐像　ほぼ完形に近いが火災のため頸部以下は右方へいちじるしく曲り、台座の一部は欠損している。原形の高さは七・五㌢程度と思われ、薄手造りで、現在の重さは二七・五㌘である。後頭部には四㍉の小さな柄が巾五㍉で突出し、鏡板に接着させたものと思われるが銹のため柄に孔があるか否かは不明であった。胸前に合掌の印相は割合に明瞭であるが、宝冠、褶襞等は火肌のためはっきりしない。鋳入は念入りで手ぎわが良く面相は細く温雅にみうける。

銅製神像片　冠部のみの残欠で形態は不明であるが頭部裏には六㍉の突出柄があって、厚さは二㍉、中央部に三㍉の一孔がある。この柄は鏡板に接着させたものと思われる。金質もよく鋳入技術も良好で、厚手造りのためか火肌の影響は少ないが、全貌をうかがい知ることのできないのが惜しまれる。残欠重量は二一・七㌘である。



第5図　御正体実測図（1：2）

鏡板片及び銅塊　鏡板の円面片三六点、鏡板ふち片と思われるもの六点のほか、仏像片と推定されるもの三点、火焔のため銅塊となったもの七点が検出された。そのほか銅製の釘一本は長さ二・五㌢で笠がきわめて大きなものがあった。

鉄器片　鉄釘一二点で大は八・五㌢の長さ、小は二・三㌢の長さを持つもので、このほか鈎片一点、かすがい片一点、鉄片一点でいずれも銹化が甚しい。

古銭片　二点、堂址内から出土し、一点は「元符」を残しているが北宋銭の元符通宝である。他の一点は銭文は不明であった。

（金井汲次）

㈡　土・陶器、石造、その他の遺物

土器、陶器片は総計一一三点の検出をみた。そのうち土師器片

（国分期）は一〇三点であるが細片が多く復元した数はきわめて少ない。須恵器片は四点、灰釉陶器片は三点で、二点は第三号堂址付近から表採されたものである。これ等の遺物を表示すると次のごとくである。

第一表　土・陶器表

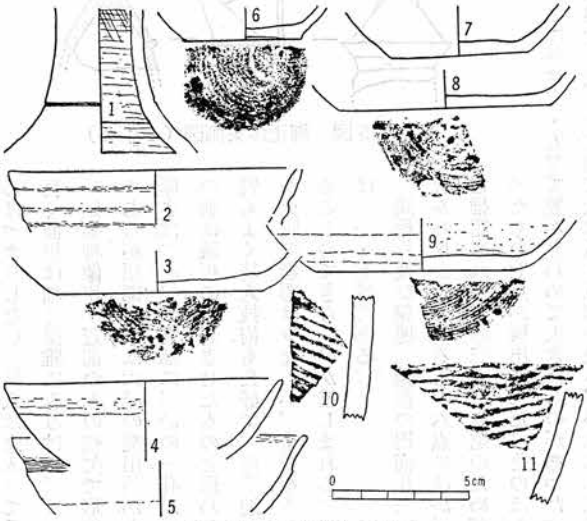
番号	器形	法量 器高	法量 口径	法量 底径	胎土	焼成	色調	摘要
1	壺	現5.5	現3.3		良	堅	淡褐色	灰釉長頸壺 ロクロ整形 第二号堂址付近で表採
2	坏		11		良	堅	青灰色	須恵器 ロクロ整形
3	坏			8	砂粒含	やや脆	褐色	土師器 ロクロ整形 糸切底
4	坏		10.5		良	堅	内黒 外赤褐色	土師器 ロクロ整形
5	坏		11		良	堅	茶褐色	土師器 ロクロ整形 一号堂址前出土
6	坏			4.5	砂粒含	やや脆	内黒 外褐色	土師器 ロクロ整形 糸切底
7	坏			5	良	堅	内黒 外茶褐色	土師器 ロクロ整形 糸切底
8	坏			8	良	堅	内黒 外褐色	土師器 ロクロ整形 糸切底
9	坏			7.7	良	堅	内黒 外褐色	土師器 ロクロ整形 糸切底
10	甕				良	堅	青灰色	須恵器 器表は畳目文

摘要欄中に出土場所を記載したもののほかは第一号堂址内の地下から検出されたものである。

砥石四点はいずれも堂址内の地下から発掘され、いずれも中砥で磨滅が甚しく半折している。次表にその概要を示めす。

第二表　砥石表

番号	長さ cm	色調	摘要
1	7	乳白色	四面使用痕 ばち状
2	7	淡褐色	三面使用痕
3	4.3	青灰色	二面使用痕
4	3.3	黒色	三面使用痕



第6図　出土遺物実測図

石臼片四点はいずれも下部臼で安山岩質石材を加工しているが、四点とも半分に割れている。第一号堂址南下の湧水付近から表面採集した。

第三表　石臼表

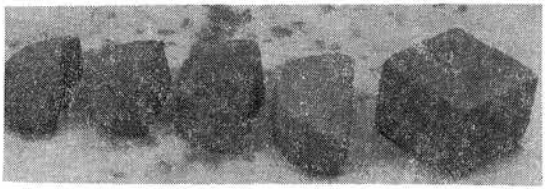
番号	直径 cm	中心部高さ cm	外端部高さ cm	中心の穴 直径 cm	中心の穴 深さ cm	重量 kg	摘要
1	31	14	12	3.5	5	10.9	半割　下側は凹む
2	31	14.5	11.5	2.5		11.4	半割　下側は凹む　中心の穴は下まで通る
3	27	13	10.5	2.1	3.5	7.4	半割　下側に荒いノミの痕がある
4	30	11.5	10			7.6	半割　火焔のため焼け条痕不明

五輪塔地輪一点は堂址裏の廻縁束石付近から発掘され凝灰岩質の石材を用いている。高さ一九、五㌢巾二二㌢を算え、工作は念入りに仕上げている。二〇余年前に檀原長則氏がこの付近で水輪一点を発見し、小学校へ贈られた由であるが、現在は所在が不明で惜しまれる。

打製石鏃（無柄）は堂址内中央部から一点発見された。昨年の緊急分布調査の折には第三号堂址付近から打製石斧片一点が表面採集されているが、縄文時代の狩猟がこの地で行われたことを物語る。

堂宇焼失の際の木炭片・灰等も検出されたが出土量は比較的少かった。堂裏の廻縁束石付近からは割合に大きな木炭片の出土をみている。また、堂裏南隅からは獣骨片が検出された。

（金井文司）



第7図　石造遺物

五、むすび

長野県町村誌北信篇には「往々土をうがつに仏器或は石碑古瓦等出づるあり。」と登載され、遺物の出土例をあげてはいるが、その遺物は散逸して見ることができないのが惜しまれる。「古瓦等」の記事に注目しなければならぬが今回の調査においては検出することはできなかったが須恵器片のことを指すものかとも思われる。

第一次発掘調査によって第一号堂址の礎石群はほぼ旧態のまま検出され、堂宇の規模を確認することができた。また御正体三軀をはじめ各種の遺物も発掘されたが、土器片、陶器片、古銭等から平安時代後期から中世に及ぶものであることが判明した。したがって第一号堂址はこの期に存在していたものとみてよいのではあるまいか。長野県町村誌によると「大同の頃創建、田村将軍開基」とあって、坂上田村麻呂の開基伝承は、第一号堂址調査の結果では、そこまでさかのぼれるか否かは疑問がある。また、堂宇廃絶について同誌は「七堂伽藍、堂頭十二坊あり。然るに永禄中、川中島合戦の際、民屋共に兵火にかかり、僧徒悉皆他山に離散し、廢院となる。」と述べている。第一号堂址は火災によって煙滅したことは礎石の焼

けや、木炭片・灰等の検出によって判明した。しかしその廃絶の時期については明確につかむ資料は存在しなかった。ただ石造文化財は中世も相当降る時期のものであったことから堂宇炎上は中世も後期とみたいのであるが、今後の継続調査によって究明されることであろう。

（金井汲次）